

8. 平成4年当科を受診した難聴児についての問題点

川城 信子*

1. はじめに

難聴の発見が実際に何歳でおこなわれているかについて、国立小児病院耳鼻咽喉科を受診した症例について調査し、保健所で施行されている3ヵ月健診、1歳半健診、三歳健診との関係を見ることを目的とした。

2. 対象と方法

1992年(平成4年)に当科にて70dB以上の難聴と診断した症例について 1) 初診時年齢 2) 難聴に気づいた年齢 3) 原因 4) 主訴 5) 最初の受診相談 について検討した。

また70dB未満の中等度難聴について 1) 難聴に気づいた年齢 2) 初診年齢 について調

査した。

3. 結果と考察

1) 70dB以上の難聴児の初診年齢と難聴に気づいた年齢について

当科を受診し、70dB以上の難聴と診断したのは23例であった。難聴の程度を70~80dB, 80~90dB, 90~100dB, 100dB以上にわけ、初診時年齢等について検討した。

イ) 我々は難聴の発見を1歳までに行いたいが、上の表のごとく実際には1歳未満は23例中2例のみであった。

ロ) 難聴に気づくのは90dB以上の難聴では2歳までに気づいて受診していた。

ハ) 70~80dB, 80~90dBの難聴では予想外に

初診時年齢

年齢	0~1	1~2	2~3	3~4	4~5	5~	計
70~80	4	1	2	1	1		9
80~90			1			2	3
90~100	1	2					3
100~	1	6			1		8

気づいた年齢

年齢	0~1	1~2	2~3	3~4	4~5	5~	計
70~80	1	4		2	2		9
80~90			1	1		1	3
90~100	1	2					3
100~	3	5					8

*国立小児病院耳鼻咽喉科

2歳と早期に難聴に気づいた症例があるが、2歳以後にもちらばる傾向があった。

ニ) 高度の難聴がありながら受診が4歳以後になる症例の原因は両親に問題があるように思われた。先天性風疹による難聴のために1歳半で訓練を開始していながら、その後放置し、4歳で受診した症例があった。コミュニケーションはゼスチャーで行っている状態であった。両親の受入れに問題があることがある。

2) 主訴について

イ) 70~80dBのグループでは言葉がでていても、発音がはっきりしない、パパをパと省略する、何を言っているかわからないといった言葉の問題を主訴とする症例が3例あった。

ロ) ハイリスクベビーについては、すでに新生児科や神経科などでABRによるフォローが行われており、ABR異常を主訴に依頼となる症例があった。

3) 難聴の原因

周産期のハイリスク (未熟児, 低酸素)	6 (26%)
先天性風疹	3 (13%)
遺伝性	2
血族結婚	1
合併奇形	2
特発性難聴	1
原因不明	8 (35%)

イ) ハイリスクベビーが6例、1/4をしめた。

これは国立小児病院の特徴であろう。この傾向は、周産期の救命技術の向上とともに全国で、将来増加していくと考えられる。

ロ) 先天性風疹症候群が3例あった。1例は昭和62年の大流行の時、2例は平成3年の母体風疹罹患であった。現在行われている中学生女子を対象とした予防接種だけでなく、小児への風疹予防接種が望まれる。産科医や一般への先天性風疹についての啓蒙もまた重要である。

ハ) 合併疾患(四肢機能麻痺とう)をとともう難聴もあり、総合的な訓練の施設が望まれる。

4) 最初の受診相談

保健所	1
他病院	8
新生児科, 神経科	6
当科	8

イ) 最初に相談するのは病院が多い。8例、約35%が他の病院から紹介された。新生児科や小児神経科の院内依頼が6例であった。言葉の問題ではじめに小児神経科に受診する例があった。

ロ) 保健所への相談は1例のみであった。多くの症例が1歳6ヵ月健診の前に気づくためであると考えられる。1歳6ヵ月健診時には聴覚発達についてのアンケートを施行し、さらに言語発達に留意する必要があると考えられる。

5) 中等度難聴症例の受診年齢

1988年1月から1989年11月の約2年間に当科を受診した30~70dBの難聴症例は26例であっ

来院時の主訴

	ABR異常	音に反応がない	言葉が出ない	言葉が不明瞭
70~ 80	1	3	2	3
80~ 90		2	1	
90~100	1	2		
100~	1	5	2	

た。難聴に気づいた年齢を図1に示した。1～8歳に散在した。中等度難聴では言葉の遅れで気づくことが多く、3～6歳が山をなした。難聴に気づく年齢が遅いのは特徴であった。初診年齢を見ると5歳にピークがあり(図2)、気づいていても受診の年齢はさらに遅くなることわかる。70dB未満の難聴に関しては三歳児健診での発見が可能になり、耳鼻咽喉科の参加意義が大きいと考えられる。問題は聴力検査である。3歳という年齢は精神運動発達の面で差がある時期で適切な聴力検査の方法を選択しないと、正確な聴力を測定できない。3歳児で標準純音聴力検査を施行することは無理である。言語発達遅滞のある小児には特に適切な乳幼児聴力検査を選択することが必要である。

4. ま と め

1) 1992年当科を受診し、70dB以上の難聴と診断した症例は23例であった。1歳未満は23例中2例と少なかった。2歳までに受診して

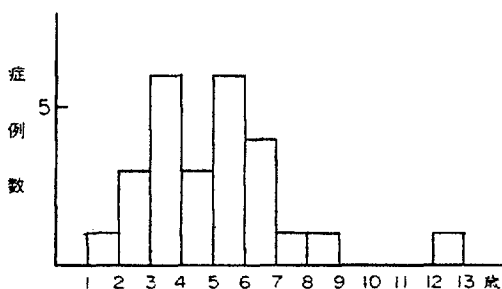


図1 難聴に気付いた年齢

いたが、もっと早期でのスクリーニングを行う必要がある。

- 2) 難聴の原因は低体重未熟児、低酸素状態といった周産期のハイリスクベビーが6例、1/4と多かった。これは当科の特徴と考えられるが、救命技術の向上とともに全国的に増加していくと考えられる。先天性風疹症候群による難聴が3例あった。この中2例は平成3年の発生であった。中学女子に対する風疹予防接種が行われているが、流行を予防するのは幼児に対しても予防接種を施行しなければ、効果がない。また、産科医や一般への先天性風疹症候群についての啓蒙も重要である。
- 3) 70dB以上の難聴では保健所をとおってくる例は少なかった。
- 4) 70dB未満の難聴では受診年齢は5歳にピークがあり、発見が遅れる。三歳児健診はこのような中等度難聴をスクリーニングするのに非常に意義がある。3歳児の聴力検査を確実かつ適切に検査する必要がある。

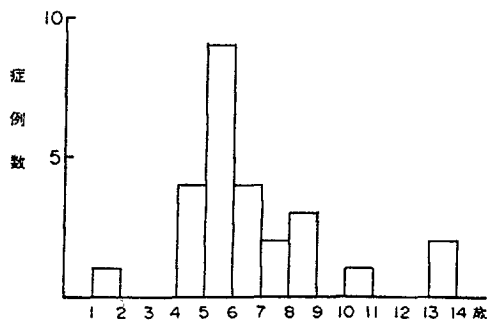


図2 初診年齢



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. はじめに

難聴の発見が実際に何歳でおこなわれているかについて、国立小児病院耳鼻咽喉科を受診した症例について調査し、保健所で施行されている 3 ヶ月健診, 1 歳半健診, 三歳健診との関係を見ることを目的とした。